

船井情報科学振興財団

留学前報告書

2020年6月
兼田 真周

はじめに

2020年度 Funai Overseas Scholarship 奨学生の兼田 真周と申します。今年3月に北海道大学工学院の修士課程を修了し、今秋からイェール大学化学&環境工学の博士課程へ進学予定です。第一回留学前報告書では、学位留学を目指すきっかけとなった米国留学体験と、実際の出願準備で合格に向けて実践したことをご紹介いたします。これから海外大学院へ進学を志す学生の方々にとって少しでも参考になれば幸いです。

米国大学院進学を目指した理由

学部3年生の時に参加した米国大学院学生会主催の説明会で、学位留学のことを初めて知りました。当時から留学にはとても憧れていたものの、まだまだ雲の上のような選択肢に思え、必要な英語力と研究力を身に付けるため北大の大学院へ進学し、指導教官の推薦によって修士一年次の9月から約1年間イェール大学へ留学することができました。この留学体験によって学位留学を目指す決心をしました。

メンター制度

私は修士課程に進学してから留学したので、興味のある研究テーマの知識や少しは実験技術が身に付いており、留学期間の1年間で教授からひとつのテーマを与えられ自ら担当することが出来ました。しかし全く新しい研究環境かつ見慣れない研究テーマに初めはとても不安でした。この不安を解消してくれたのがメンター制度であり、滞在中ずっとお世話していただいたポスドクの方でした。研究室では、ひとりの教授の次に客員教授・ポスドク、博士課程後期学生、博士課程前期学生、客員研究大学院生（私）・学部研究生という構成でした。研究室内での指導システムは非常に良く機能しており、研究初心者の学生は先輩学生やポスドクの方とペアを組み研究を進めて行きます。それらの小さなグループ郡の総指揮を務めるのが教授でした。私はメンターであるポスドクの方から、実験ノートの取り方や実験の実演、データ解釈、発表スライドの作り方、論文執筆までありとあらゆる事を非常に丁寧に学習することが出来ました。実験トラブル時や、特に論文執筆の時には何度このメンター制度に救われたか分かりません。

気軽にコミュニケーション

研究室や学内では、いつでも気軽に疑問を投げかける雰囲気には溢れていました。自分よりも年上の方々と会話する際も全く例外ではありません。例えば研究の内容について質問すれば、私のような visiting の学生が相手であっても丁寧に説明してもらえ、ときには議論すらしてくれる環境は新鮮でとても好感を持ちました。ある時、プロジェクトの情報交換のため共同研究者の方が海外から研究室を訪問され、その際に私が実験室のツアーを担当することになりました。研究室の評判に関わることなので心配していましたが、とても気さくな方で実験の相談や疑問点等詳しくお話しすることができました。このような留学先の“研究室として”の業務にも携われる機会が増えていき、周りからも研究グループの一員として扱われているように感じることができました。

正規過程学生への憧れ

イエール大学では月に\$400の tuition?を支払うプログラムで訪問していれば、基本的に正規学生と同じサービスを大学から受けることができます（食堂・ジム・図書館等の利用）。そのため構内ではあまり自分が客員学生として在学していると自他共に意識することは多くありませんでした。しかし研究室で正規博士課程の学生を隣で1年間みていると、学会やワークショップでの発表や学内のカリキュラムを着々となし、プレッシャーはありながらも実力がぐんぐん伸びて行く同世代の学生達の様子をどうしても羨ましく思いました。この強い憧れがきっかけとなり、海外大学院へ出願することを決めました。

合格のために実践したこと

学位留学された先輩方の体験報告書（主に船井情報科学振興財団ウェブサイト）より、海外大学院入試の合格基準は曖昧なため自分の強み弱みを活かしたオリジナルな対策準備が有効であることを知りました。加えて、前回の留学では先生同士の口約束（＝推薦状）から始まり、国内奨学金の獲得によって留学が実現したことを踏まえ、今回の学位留学においてもこれら2点に集中して出願対策を行いました。

推薦状

推薦状は数ある出願書類の中でも取り分け重要な書類です。出願を決めたと同時に、～3名の推薦者の顔が浮かぶ又は繋がりを作るために行動を起こすくらいの心構えが必要です。推薦者候補として大事な要素や、具体的に何を描いていただくか等の情報はネットや書籍から手に入ります（貴財団専攻委員である加藤先生のニューズレターや是永先生著の「できる研究者になるための留學術」等）。私の場合、

北海道大学とイェール大学の実質2人の指導教官と、学部生のときに参加した研究インターンシップでご指導頂いた研究者の方に推薦状をお願いしました。良い推薦状を準備するには、指導教官と良好な関係を築きながら日々の研究を能動的かつ熱心に取り組む他ないように思います。

推薦状のように出願書類には含まれませんが、私は志望大学の所属したい研究室の教授に事前にコンタクトしました。出願する可能性のある大学の指導教官～10人へ、過去の研究経験・実績・興味のある研究テーマ・今年博士学生をリクルートするかどうかを記載したメールを7月上旬に一斉に送りました。返信いただけた中から、リクルートの予定と研究テーマの合致をもとに5校程度まで絞り込みました。実際に出願する大学の教授とはスカイプやメールでこまめに連絡を取り、選考プロセスでサポートしてもらおうようお願いしました。ある大学では出願締め切りを過ぎていたにも関わらず、教授に直ぐに相談した結果、無事に合格することができました。

奨学金

奨学金の獲得は私にとって最重要課題でした。イェール大の研究室の学生から、留学生は奨学金の有無が合否に決定的であると伺っていたので、自分の中では奨学金の獲得＝大学院合格と考えて準備しました。奨学金の申請書を執筆する際、私はとにかく多くの方にコメントしていただきました。大学の国際事務課や学位留学されている先輩方から意見していただき、他専攻の研究者や理系ではない方が読んで分かりやすい文章と構成を目指しながら推敲を重ねました。

11月上旬に貴財団から奨学生採択の通知をいただいたときは、安心を通り越して大学院に合格したかと思えるくらい嬉しかったです。実際にイェール大を含めた出願先の教授へ採択の結果と支援内容をお伝えしたところ、全ての方から合格をほのめかす内容の大変好意的な返信をいただきました。加えて、出願後、大学から合否発表を受ける直前にロータリー財団グローバル補助金奨学生に正式採択が決まり、より合格へ近づくことができました。

さいごに

海外大学院の出願準備は地味な作業が多く、孤独な環境で大変苦労しました。自分の能力を疑い計画性の無さに何度も気持ちが折れそうになり、自信を失い出願自体がもう無駄なことに思っていた時、熱心に相談に乗って頂いていたある先生から「奨学金も大学院も合否判定は選考委員が行うものであって、君が出願する前から心配することではない。」と言われ目から鱗が落ちた気分でした。

周りの方々のサポート無しでは合格どころか出願にも漕ぎ着けられませんでした。出願に理解と協力してくれた家族を始め、各書類について大変丁寧なコメントをして頂いた北大国際事務課と留学中の先輩方、推薦状やその他貴重なアドバイスを頂いた貴財団選考委員の加藤先生と高橋先生、最後までご指導頂いた研究室の先生方、気分転換に付き合ってくれた研究室の同期や先輩後輩達には感謝しきれません。本当に大変なご協力を有難うございました。

環境に恵まれやっとの思いで手にしたチャンスなので、全力を尽くして学位取得を目指したいと思います。